

## はじめに 「オーガニックフェスタ」って何？

最初に、「オーガニックフェスタ」って何なのかを説明しておきましょう。

「オーガニック」は有機農業の「有機」、「フェスタ」はイタリア語で「お祭り」のことですから、「オーガニックフェスタ」は「有機農業のお祭り」という意味です。

「オーガニックフェスタ」という名前のイベントは、2004年4月に開かれた「オーガニックフェスタ in Tokyo」が初めてでしょうか。それが鹿児島に飛び火し、2008年から「オーガニックフェスタ鹿児島」がスタートします。鹿児島のフェスタは1年目でいきなり2万人を集め、関係者の間で大きな話題になりました。

私たちも鹿児島の成功を知り、「日本の南端の鹿児島で2万人集められるなら、北端に近い秋田でも結構いけるかも」と思って秋田のフェスタを計画しました。

現在では鹿児島、秋田のほか、北海道、島根、山形、三重などで開催されているようです。各地のフェスタはそれぞれ独自の内容で行なわれているので、ホームページなどで見てみると参考になるでしょう。

でも、だいたい共通しているのは、地域の有機農家を集めて、年に1回くらい盛大に開かれる農家と消費者の交流と直売のイベントということでしょう。

\*\*\*\*\*

## 目次 「オーガニックフェスタ in あきた」はこんなふうに進めました

はじめに	「オーガニックフェスタ」って何？	2
実行委員会を作る	農家と消費者が一緒に作れば一番いい	3
趣意書を作る	趣旨と目的をはっきりさせよう	5
会場を決める	広い駐車場が付いた屋内会場にこだわった	9
出展の基準を作る	自分たち独自の基準を作ろう	11
出展者を募集する	コンパクトなチラシを作ろう	15
有機であることを確認する	「秋田方式」を考え出す	20
開催資金を集める	収入には3つの柱がある	29
ポスターやチラシを作る	若い消費者のセンスが光った	30
企画を練る	オーガニックの世界を感じる	33
参考資料：オーガニックフェスタ in あきた 2011	出展要領	36
あとがき		38

## 実行委員会を作る 農家と消費者と一緒に作れば一番いい

オーガニックフェスタをやるためには、まずフェスタを主催する団体を作らなければなりません。どうやって作ればいいでしょうか。

秋田では農家と消費者と一緒に実行委員会を作ってフェスタを開催しました。有機農業を研究している大学教員（つまり私）も実行委員会の副委員長として最初から加わりました。

農家と消費者の数は半々か、消費者の方が多かったですね。秋田では年1回のフェスタを8月下旬に開催したため、実行委員会は春から夏にかけて忙しくなりましたが、農家も春から夏までは米から野菜まで目が回るほど忙しい。

ですから振り返ってみると、フェスタの企画や準備は消費者委員が中心になって進めていきました。それにはいい面と悪い面があったと思いますが、結果的に秋田のフェスタには消費者のアイデアやセンスがずいぶん取り入れられました。

後で詳しく説明しますが、たとえば子育て中のお母さんたちに的をしばったチラシのデザインやキャッチコピーの制作。ツイッターなどのソーシャルメディアを使ったPR。「マルシェ」風の野菜のディスプレイ。出展者のお米や味噌を使ったおにぎりの販売。有機野菜のおいしさを知ってもらうための「オーガニック野菜バー」、食べ物だけでなくオーガニックな暮らしを実感してもらうための「農のファッション」「羊の学校」「オーガニックコスメ」などの企画ブース。

こうした消費者の試みが、秋田のフェスタの個性を作りだしたといえます。

### ■農家にまかせていては進まない場合も

こういって、「有機農家が集まって開催すればよかったんじゃないか」と思う人もいるでしょう。確かに地域の有機農家が集まってフェスタを開くのが一番自然で簡単なように思えますし、実際に農家主導でフェスタを開いているところもあります。

でも、どこでも農家主導でやれるかというと、なかなか難しい場合もあります。「フェスタをやろう」と声をかけて、地域の農家がそれに納得してついていく、そんな力のある農家リーダーがいない場合は、農家だけにまかせていても進まないでしょう。

それと、この先順番に説明していきますが、フェスタを開くには、思った以上に細かい事務作業のノウハウが必要です。ざっと見ても、出展者を募集する、出展の基準を作る、会場を借りる、開催資金を集める、マスコミなどを通してPRするなどの作業をこなしていかなければなりません。有機農家は安全でおいしい農産物を育てるプロであっても、こうした実務は苦手な人が多いものです。

そして、何より農家だけで新しい試みをするのは心細いものです。「もしお客が来なかったら」「もし全然売れなかったら」という不安を抱えながらフェスタを開いて、もし本当にお客さんが来てくれなくて、何ヶ月も手塩にかけて育てた野菜が売れなかったら、農家はきっと悲しく、ガッカリした気持ちになるでしょう。

そんな事情が入り交じっているので、消費者が実行委員会に参加して農家の苦手な部分をカバーした方がうまくいく場合があるのです。

## ■秋田はどん底からのスタート

でも、実際には秋田のフェスタはそれ以前の、いわばどん底からのスタートでした。

秋田では有機農家、特に有機野菜を作る農家の数はとても少ないのです。米どころということで有機米を作る農家は大潟村を中心にそれなりにいるのですが、有機の野菜農家は本当に少なく、お互いの交流も少ないため、どこで誰が有機農業をやっているかを農家同士がほとんど知らないという有り様でした。

私も消費者の方から「無農薬野菜を作っている農家を知りませんか」と聞かれることが何度もありましたが、「残念ながら、秋田にはほとんどいません」と答えざるを得ませんでした。

その原因としては、今も言ったように、秋田県の農業が米に片寄っているため、野菜農家が少ないという事情がまずあります。また JA（農協）の力が強いために、農薬や化学肥料をまったく使わない有機農業を「変わり者」「異端児」として排除する風潮が強かったことも原因としてあげられるでしょう。それに加えて秋田県も有機農業に対して消極的な態度でした。

でも、秋田県にも有機農業の長い歴史があります。1970年代に旧仁賀保農協（現 JA しんせい）の佐藤喜作組合長が呼びかけた有機農業運動と自給運動は全国的に有名です。喜作さんは現在も NPO 法人日本有機農業研究会理事長として元気に活躍しておられます。

また大潟村には故郷津恒夫さん・故早津勤一郎さんらによる大潟村有機農業研究会の運動があり、発がん性のある除草剤 CNP を全国に先駆けて村全体で使用禁止にしたり、農薬の空中散布を全廃したりという輝かしい実績を残しています。大潟村は今でも全国最大の有機米の産地ですし、国の有機農業モデルタウンに指

定されています。有機農家の組織としては、秋田県有機農業研究会（佐藤誠会長）や秋田県有機農業推進協議会（相馬喜久男会長）のほか、東北全体の有機農家のネットワークである東北有機農業推進協議会の会長を相馬喜久男さんが務めています。

## ■農家と消費者と一緒に実行委員会を作った

「オーガニックフェスタをやろう」という声を最初に上げたのはこうした有機農家でした。農家の努力だけでは秋田で有機農業を広めることは難しい。そんな手詰まり感が強くなっていった頃、鹿児島県でオーガニックフェスタが開かれ、1日で2万人も集まったというビッグニュースが入ってきました。

そうか。農家と消費者が出会う場をうまく作れば、産直などと違った形で有機農業を広めることができるかもしれない。九州の南端の鹿児島で2万人も集められたのだから、秋田でもうまくいくかもしれない。

でも、先に述べた理由で農家だけではフェスタを開催するのは難しいと考え、農家と消費者と一緒に実行委員会を作ることになりました。

1年目のフェスタは立ち上げが遅く、3カ月の準備期間しかなかったため、わずか10名足らずの実行委員がフル回転で準備に駆け回りました。うち5人が30代から40代の女性の消費者でした。

2年目は実行委員の数も増え、さまざまな消費者が参加してくれました（奥付に実行委員の名簿があります）。やはりオーガニックフェスタは農家だけでなく、多様な消費者が実行委員会に参加して、いろいろなアイデアを出し合い、みんなでわいわい作り上げた方がいいフェスタになる。これはまちがいないでしょう。

## 趣意書を作る

## 趣旨と目的をはっきりさせよう

「オーガニック」という言葉には何かすてきな響きがありますよね。「エコ」「オルタナティブ」「スロー」などの言葉にも共通しますが、環境への負荷を減らした心優しい暮らしというようなイメージを思い起こさせます。

これを「有機農業祭」と日本語に直訳してしまうと、味も素っ気もなくなってしまいます（有機農業祭という言葉にはそれとしての良さがあります）。せっかく「オーガニック」というすてきな言葉を使うのですから、言葉の持つイメージを大切にしましょう。

### ■有機農業の理念を学ぶ

でも、同時に有機農業には哲学や理念の面、いいかえると農や食に対する根本的な考え方の面があります。それを学び、フェスタのなかにきちんと位置づけることはとても大事なことです。

たとえば、有機農業ではなぜ土づくりを重視するのか。農業や化学肥料や遺伝子組み換え技術を使わないのはなぜか。加工食品を避けて家庭料理を重視するのはなぜか。なぜ自給にこだわるのか。地産地消や身土不二と有機農業はどういうつながりがあるのか。生産者と消費者の信頼を重視するのはなぜか……。

このように、有機農業には農と食、ひいては私たちの暮らしや生き方に関する根本的な哲学や理念がいろいろあります。有機農業に関心を持つ人たちは、こうした問題にこだわり、長い間議論を重ねてきました。みなさんの周りの有機農家や消費者にも、こだわりが強く、気むずかしいとか、取っつきにくいような人もい

るかもしれません。

フェスタを開催するに当たって、有機農業の理念をどうとらえるかという点を実行委員会である程度議論しておいた方がいいでしょう。そうしないと、フェスタがイメージだけの軽いイベントになってしまったり、真剣に有機農業に取り組んできた地域の人たちからフェスタが評価されないということになりかねません。

### ■フェスタの「趣意書」を書く

そのために、フェスタの「趣意書」を書くことをお勧めします。趣意書とは、フェスタを開く理由と目的をわかりやすく簡潔にまとめた文書です。

自分たちの言葉でフェスタを開く理由と目的を書いておくことは、実行委員の考え方を統一する上でも重要ですし、いい趣意書ができればパンフレットなどにもそのまま使えます。

ここまで書いて、昨年のフェスタでお客さんを対象にしたアンケート調査のことを思い出しました。「フェスタで出展している農産物が本当に有機栽培だと信用できましたか」という質問に対して、「フェスタの開催趣旨を事前に見ていたので信用できた」という回答が30%もあったのです。フェスタの開催趣旨をチラシやホームページで公開していたのですが、しっかり読んでくれている人が結構多かったのは正直驚きました。

### ■秋田のフェスタの趣意書

それでは、秋田のフェスタでどんな趣意書を作ったのかを説明しましょう。全文は8ペー

ジを見て下さい。

最初に、私たちが有機農業をどうとらえているかを次のように書きました。

有機農業は近代農業が引き起こした問題を克服し、自然に内在する生命循環にもとづいた本来の農業を追求する運動です。特に、土の中の生命循環を豊かにするために、完熟堆肥を土に施し、健康で肥沃な土づくりを重視します。

しかし、有機農業は単に土づくりや栽培技術だけにとどまらず、思想、食や暮らしのあり方、流通、政策など社会のあり方全般にオルタナティブな（代案となる）考え方を提起しています。たとえば、今日一般的になった産直、顔の見える関係、地産地消、C S A、田んぼの生きもの調査、半農半Xなどはみな有機農業運動から生まれた考え方です。

第一段落では、有機農業が「自然に内在する生命循環にもとづいた本来の農業を追求する運動」だという私たちの立場を明示しました。有機農業というと、「農薬や化学肥料を使わない」という言葉がすぐに浮かびますが、それは枝葉末節のことだと私たちは考えています。有機農業は「自然に内在する生命循環にもとづいた本来の農業」をめざしているというところがポイントだと思います。

「有機農業は本来の農業だ」という言い方ですごくいいと思いませんか。今普通に行われている農業（近代農業）は本来の農業ではないと言っているのですから。本来の農業でない近代農業に取って代わり、いずれ有機農業が主流になる時代が来る。今はまだまだ小さな存在ですが、

有機農業はそんな遠大な挑戦を続けているのです。

ところが、有機農業は単に土を耕して、作物を育てることだけにとどまらず、今の暮らしや社会のあり方を批判し、それに代わるもの（オルタナティブ）を作り出してきました。そのことを第二段落に書きました。

考えてみると、これも不思議ですよ。どうして本来の農業をめざす有機農業の運動が、産直や半農半Xのような新しい暮らしや社会の仕組みを作り出すのでしょうか。オーガニックフェスタそのものもいい例でしょう。なぜ秋田ではフェスタをやるぞと夢中になったのか、このガイドブックを読んでいるあなたはなぜフェスタに興味を持ったのでしょうか。

本当に不思議ですが、有機農業には人と人を結びつける力、人の考え方を変える力が確かにあると思います。

さて、このあと、秋田県における有機農業運動の歴史を振り返りました。運動は先人から受け継ぎ、後輩に引き渡していくものだと思います。だから立派な実績を残した地域の諸先輩を紹介し、その後で全国的な有機農業の盛り上がりにつれたあとで、私たちがフェスタに込めた思いを書き込みました。

全国的に、安全な農産物を求める消費者は増え、有機農業に興味を持つ生産者も増えています。また有機農業で新規就農を希望する若者が大幅に増えるなど、有機農業は全国で大きく広がっています。

このような全国のうねりを受け、秋田県における有機農業運動の新たなステージを拓くために「オーガニックフェスタ in あきた」を開催することにいたしました。